25. 甲状腺癌手術後の Tl-201 シンチグラフィで頸静脈が描出された1例

中野　俊一　長谷川義尚　井深啓次郎
橋詰　輝巳　野口　敦司
（大阪成人病セ・アイソトープ診）

われわれは甲状腺癌術後に施行したタリウムシンチグラフィで左頸部に集積を認め，この部のリンパ節転移を疑ったが，諸検査の結果，左頸静脈にタリウムが逆流していたものと判明した症例を経験したので報告する．患者は52歳の女性で昭和58年6月に某病院で甲状腺癌のため，右葉切除術を受けた（乳頭癌）．その後，局所再発のため左葉切除術を含め3回手術を受けたが，昭和62年12月，核医学検査を受けるため，当センターを受診した．Tl-201 2 mCi を左肘静脈より注射し生理的食塩水でフラッシュして行ったシンチグラフィで，左側頸部と上縦隔部に集積を認め，それぞれ転移を疑ったが左側頸部には明らかな腫瘤を触知し得なかったのでさらに検査をすすめた．まず右肘静脈からタリウムを注射してスキャンすると左側頸部には集積をみなかった．次に左肘静脈から Tc-99m 人血清アルブミンを注射して行ったRI アンジオグラフィでは，動態像でも2分後の静止像でも左頸静脈に放射活性の逆流，残留がみられた．すなわち，最初のタリウムシンチグラフィで左側頸部にみられた放射活性は，頸静脈に逆流してそこにとどまったものであると考えられた．上縦隔の活性は，CT でみられた胸骨柄部の破壊像への集積と考えられたが，組織学的検査は行われていない．I-131 シンチグラフィでは上頸部正中に小集積をみたのみであった．上胸部の CT で上大静脈や無名静脈を圧迫するような腫瘍性病変はみられず，このような現象の原因は不明であるが，数回の頸部手術をうけているので，瘢痕収縮などによる静脈系の血流障害によるものであろうと考えられる．

26. 副甲状腺機能亢進症における PTX 前後の骨塩量の測定

岡村　光英　小泉　義子　福田　照男
小田　淳郎　小堺　和久　池田　穂積
越智　宏暢　小野山靖人　（大阪市大・放）
萩原　　聡　森井　浩世　（同・二内）

原発性副甲状腺機能亢進症 (PHP) および二次性副甲状腺機能亢進症 (2° HP) における副甲状腺腫瘍摘出術または副甲状腺亜全摘術 (PTX) 前後の骨塩量の変化を Dual photon absorptiometry (DPA) によって経時的に観察した．

対象は PHP 5例（全例女性，平均年齢48.2歳），慢性腎不全に伴う 2° HP 7例（男性3例，女性4例，平均年齢47.7歳，平均透析期間10.7年）の計12例で，測定方法は DPA により全身 scan，腰椎 scan を行い，頭蓋骨，全身骨，腰椎 L_2～L_4 の Bone mineral density (BMD) を PTX 前，PTX 後3か月，6か月，12か月に測定した．

PHP 5例の術前の BMD に対する PTX 後3か月の平均の増加率は，頭蓋骨で13.7%，全身骨6.1%，腰椎18.5%であり，12か月後まで観察し得た2例において3か月後の変化に比し，12か月後の増加率は小さかった．

2° HP 7例は全例 PTX 後，頭蓋骨，全身骨，腰椎の BMD は増加し，3か月後の増加率は頭蓋骨26.1%，全身骨24.8%，腰椎26.5%と部位による差はみられなかった．6か月後では頭蓋骨43.9%，全身骨31.1%，腰椎31.6%と頭蓋骨の変化が大きく，12か月後には頭蓋骨87.7%，全身骨66.4%，腰椎38.4%と増加率の部位による差がみられた．頭蓋骨は3か月，6か月，12か月後と増加が持続する傾向を示し，12か月後の増加率が最も大きかった．次いで全身骨，腰椎の順であった．骨シンチで強い集積を示し，最も骨変化の著しい頭蓋骨は DPA においても同様の変化がみられ，DPA 全身 scan による頭蓋骨の骨塩定量は治療効果の観察に有用と考えられた．

Presented by Medical*Online